



2020年（令和2年）9月20日（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ「ふるさと春日井の教育文化遺産一県下児童生徒席上揮毫大会について—昭和19年空襲警報下でも行われたのは何故か？—」で行われました。講師は、河地 清氏（本会会長）で発表いただきました。

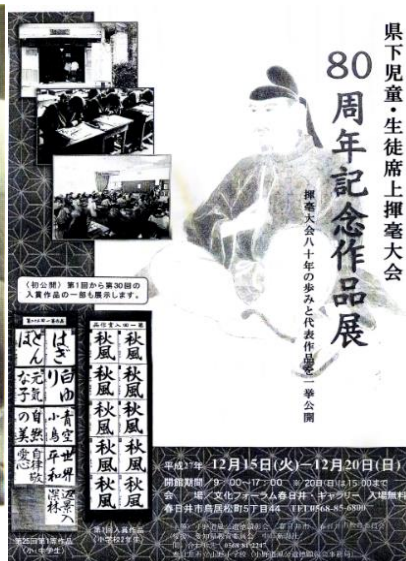
参加者は9名でした。今回も新型コロナウイルスの流行拡大の影響もあって様々な規制のある中で無事実施することができました。

### 《講演要旨》



大会前の練習風景

写真①



写真②

写真①は第30回（昭和40年）本番前の練習風景。父兄が付き添って20分間本番前の練習をしている様子です。写真②は第80回（平成27年）80周年記念のポスターです。

まず最初に県下児童・生徒席上揮毫大会はどのような行事であるのかが2本のビデオテープで紹介説明された。今年（令和2年）で85回を迎える春日井市が誇る、教育文化の伝統行事として継続してきているものであるということ。単に書写（書道）教育の一環としてだけではなく、地域の歴史、文化に根付いた地域全体の行事として地域力も育てながら今日まで継承されてきているということの解説があった。

今回のテーマ「昭和19年空襲警報下でも行われたのは何故か？」をとりあげた理由について解説された。今日、新型コロナ感染症の禍の続くなかで、多くの伝統的行事（高校野球夏の大会、オリンピック東京大会等々）をはじめ、日常当たり前のように続けてきた様々な行事が中止、断念せざるを得ない状態に直面する中で「県下児童・生徒席上揮毫大会」も例外ではありませんでした。

「県下児童・生徒席上揮毫大会」も過去の歴史の中で、中止・断念を余儀なくされた年がありました。1941（昭和16）年12月8日未明から始まった太平洋戦争（第2次世界大戦）は、1945（昭和20）年8月15日に終戦を迎えるまで有史以来未曾有の国難の時期に直面していました。そんななかであって、戦局は日に日に厳しさを増し、生徒学童を取り巻く環境

はとても「揮毫大会」を実施する状況にはなかったようです。資料1「近代日本総合年表」岩波書店（1968年11月25日発行）の1944（昭和19）年に見られるように、戦局悪化による米軍の空襲から逃れるために児童は、疎開が進められ、生徒は勤労働員に召集される日常になり、挙国一致で戦争遂行に邁進していかなければならない状況であったからです。

（資料）中日新聞（2020.8.12）記事「1942（昭和17）年幻の甲子園」に見るように球児憧れの甲子園大会は中止となりました。当時の「選士」長野さんは、「甲子園は本当に渴望した舞台だった」と語る記事は、印象的です。しかし、同じような状況にありながら、否むしろそれよりも厳しい状況にあった、1944（昭和19）年において、空襲警報発令が頻繁に出された中において「席上揮毫大会」が実施されたのは何故か、実施決行したのは何故か素朴な疑問が湧きます。

当時の「席上揮毫大会」実施にあたって尽力した人々、学校関係（学校日誌、職員会議録等）資料を収集するべく、小野小学校（現在安藤校長先生）へ伺いました。『五十年の歩みー県下児童生徒席上揮毫大会ー』（小野道風威徳顕彰会、春日井市立小野小学校「50年のあゆみ」記念誌編集委員会 昭和61年2月8日発行）を研究に資するならということで頂きました。さらに、当時小野国民小学校校長として「席上揮毫大会」実施の当事者であられた故長谷川鉄蔵さんの自宅も訪ねました。もしか、当時のことを記録した、日記、関係資料はないかと思ったからです。80歳を越えたご子息にお会いすることができました。「当時の件については父から縷々聞いていました。しかし、関連する資料は、終戦になった時点ですべて焼却処分をしたと言っていました」とのことでした。戦後GHQの戦犯、公職者等の調査を恐れての処置であったのかもしれませんが。（陸軍工廠鳥居松製造所に勤めていた私の父親が、終戦の日から「毎日毎日書類の焼却が仕事であった」ということを聞かされたことと符合することを考えれば当時の状況が推察されます。）残念ながらそれ以上のことはわかりませんでした。唯一、当時のことを証言されたものとしては、前掲書『揮毫大会50年の歩み』の中で、長谷川鉄蔵氏が小野小学校教育後援会長として「揮毫大会五十年を回顧して」の原稿を掲載されたものがあります。資料2『五十年の歩み』の中で長谷川鉄蔵氏が述べておられることが証言の唯一のものであることを前提に検証を試みました。

「図らずも私は、昭和16年より小野国民学校に勤務することになり、この仕事に直接携わることになりました。第6回の競書会からです。この頃から挙国一致の戦時態勢となり勤労作業教育が重視されるようになりました。第7回（昭和17年）、第8回（昭和18年）と戦争は拡大し、鳥居松造兵廠周辺の高等科児童は動員され勤労学徒として筆を捨て入廠することになりました。教育内容も大きく変わりました。都会地では学校は閉鎖され学童は家をはなれて疎開することになり学校に呼びかけて参加を願うことも容易でなく、参加児童も段々と少なくなりました。でもせっかく続けて来た競書大会を挫折させてはならない。何としても続けたいとの一念でした。選ぶ題材も戦時下故士気を鼓舞するように配慮しました。第9回（昭和19年）空襲は日を迫って激しく苛烈となり造兵廠は度々爆撃され犠牲者が続出するようになりました。造兵廠に身近な地にある小野国民学校が爆撃目標になることは必

至で、ここで大会を開くなど最も危険で暴挙に等しいと関係者の多数意見は中止でした。恰この年は道風公生誕 1050 年の記念すべき年で生誕祭も催し競書会も開きたいと、諦めきれず悩みました。藤田・小林両先生は唯無言でしたが意中はよく察せられました。両先生の意を体し、恩師日比野寛先生の門を叩きご意見をうかがうことにしました。幸いに恩師から力強い助言を得て、万難を排し敢行することに意を決しました。天佑か、道風公の遺徳か、さしも厳しい連日の空襲も、生誕祭の日と競書会の日は全く空襲なく無事に開くことが出来、やれやれと安堵しました。当日参加した児童や付き添いの方は皆防空帽ともんぺ姿に身をかため胸に名札（非常の場合に備えて）をつけて参加しました。」と証言されています。

（資料）『戦時下・愛知の諸記録 2015』（あいち・平和のための戦争展実行委員会）2015.8.15 発行）によれば、揮毫大会は、11/4（土）でありましたが、11/2（木）、11/3（金）は空襲警報は発令されていません。実際に空襲によって犠牲者、被害にあったのは、1945（昭和 20 年）8/14PM14:50～15:24 の空襲で鳥居松製造所、鷹来製造所へ投下された原爆模擬爆弾「パンプキン」により犠牲者と被害が出たことが記録されています。

#### 1. 多数意見は大会中止であったにも関わらず何故実施できたか

①長谷川鉄蔵氏の証言によれば、小野道風生誕 1050 年というおおきな歴史の節目を迎えていたこと。地域の小野道風にたいする畏敬の念と、地域の誇り伝統を絶やしてはいけないという強烈な、地域力、情念が下地にあったことではないかと推察できます。

②氏の意味決定のキーパーソンとなったのは、藤田東谷、日比野寛を上げることができます。藤田は、小野道風をいち早く顕彰する活動をした書家であり、地域の書道教育の先駆けとなった教育者であり、日比野は長谷川鉄蔵氏の愛知一中時代の尊敬する恩師で愛知教育界の重鎮であり、衆議院議員も務めた人物であったことです。

まとめとして言えることは、なによりも地域の人々の「小野道風」にたいする崇高なまでの愛着と誇りの風土が根付いていたことが「なんとしてでも伝統を絶やしてはいけない」という地域の人々のデスペレート（必死の）な熱が大きな原動力となって「空襲警報下の中」といえども「児童・生徒席上揮毫大会」を実施することになっていったのだと思います。

（記録：河地 清）

### 〈会報編集後記〉

『会報 76』（「ふるさと春日井の教育文化遺産—県下児童生徒席上揮毫大会について—昭和 19 年空襲警報下でも行われたのは何故か？—」）の編集をしながら、「春日井」というところが「書文化と書教育」に根付いた地域であることを改めて認識させられました。毛筆作品「街角メッセージ」が貼られた商店街街灯の風景。

（文責：河地 清）



